

《正岡子規（36）の続き》その298

天涯茫茫生

列伝⑭ 中村不折（本名鉦太郎）

生年 一八六六（慶応二・七・一〇）
 歿年 一九四三（昭和一八・六・六）
 享年 78歳
 死因 不詳

洋画家・書家。

東京に生れ、家貧のため、故郷信州に移り小学校教員となる。明治21年再上京して、小山正太郎、浅井 忠に洋画を学ぶ。

明治27年、新聞「小日本」社に入社。日本の新聞挿絵を描く。34年〜38年フランス留学。ジャン・ポール・ロランズに師事。

不折の日本出発の前に、子規は『墨汁一滴』に不折について、6月25日から29日まで5回にわたり論評した。総字数六三〇〇余字の長論である。

病中仰臥してこれだけの文章を書くのだから（口述だろう）、子規の不折に対する関心の深さがうかがえる。

その大意を云うのはむずかしいが、子規が不折の意見によって、油画の日本画に勝るとも劣るものではないと信ずるに至ったことである。

初め子規は「小日本」の主筆として、挿画家を求めたが適当な人物を得るに困難であった。浅井 忠の紹介で不折を知り、四、五枚の下畫を示されて、「筆力勁健にして凡ならざる所あり」尋常の畫家にあらずと即座に判断して、採用した。

それまでの不折は、不忍池の畔に一間の部屋を貸り、自炊しながら勉強し、困窮を極めていたが、それからは、生活も安定し、新聞社に近い淡路町に下宿した。子規は社からの帰りにその下宿を訪い畫談を聞くことを楽しみとした。

不折の服装のきたないのと、耳が遠いことが、常職を求めることができず、困窮した原因であるが、入社後もそれらによって人々の軽侮を受けることがあったが、畫に於ける伎倆は次第にあらわれ何人も賞讃せざるべからざるようになった。

達磨百題、犬百題、其他何十題、何五十題など滾々として趣向の盡きないのを見て、素人も玄人も舌を巻いて驚かないものはなくなった。

畫く者は論ぜず、論ずるものは畫かず、不折の如く画家にして論に長ずる者は少い。君に一言質問すれば、その語の終らざるうちに君の答辯は一時間も二時間も、理路整然として、実例あるものは実例を挙げて論ずるのである。

画家は多くは性疎懶で、人に頼まれたものも期日までにできないことが多いのに、不折は依頼されたものは必ず期日までに完成する

ので、新聞社、出版社の如きは甚だ君を重宝がったのである。

しかも君に畫の大意を示せば、こまかい指示をせよとちどころに注文以上の画を成すのである。

君が赤貧洗うが如き中から身を起し、独力で住居と画室を建築し、それから二年ならずで洋行を思い立ち、しかも他人の力を借りざるに至っては、君の勤儉に驚かざるを得ない。酒も飲まず、煙草もまず、ただ勉強一筋である。

6月28日、羯南の催しで子規庵に不折の送別会が開かれた。この頃の病状は、高熱のほか、繃帯取り替えの度に痛み堪えかね泣きわめくような状態のなかで、送別会を催す（羯南の催しとはいえ）のは子規の友人に対する敬愛の念のあらわれであろう。

羯南の催しとあるから、飲食の費用は羯南の持ち出しだったのであろうか。何とも書いてないところから推せば、子規の母や妹の手料理だったのであろう。

正客の不折をはじめ、鳴雪・桂 湖村・虚子・鈴木（大橋）豹軒・滝 精一その他来あわせた浜村蔵六などが賑やかに会合した。「草庵為に光を生ず」と子規は書く。嬉しかったのであろう。

子規は浅井 忠の留学送別会も自宅で催している。画家が好きだったのであろう。このときは、再び会えるかどうか大いに気にかけていたが、不折の場合は再会の喜びを味わうことはできなかった。